

今できることは二つしかないんだ！

戸田雅美

その日は、朝から雨が降っていて、幼稚園の園舎は、保育室やテラス、玄関ホール、遊戯室と、子どもたちの遊びが広がっていた。お弁当の前に、五歳児はみんなで制作をするようになっていた。十一時近くに片づけをして、片づけを終えた子どもから、担任が出したテーブルに椅子を持ってきて座り始めた。テーブルは五、六人ずつ座れるようになっていて、このクラスでは、グループごとに座ることになっている。ふと気がつくとき、テーブルに一人で座っているかんじとひさとが、言い合っているのが見えた。かんじは、ここは自分たち「らいおんグループ」が座るのだ

から、ひさとたちはほかのテーブルに座ってほしいと言っている。これに対し、ひさととは、自分たち「きりんグループ」が座るテーブルはないので、かんじの方こそこのテーブルを空けてほしいと応じる。

見ると、ほかのテーブルには、もうグループごとに子どもが座っていて、どうやらひさとたち「きりんグループ」が座る場所はないらしい。ということは、らいおんグループはかんじを除いて、みんな別の所に座っているということになるのかしら……。私が考えながら見ていると、ひさとが「ほら、あそこに、らいおんグループの仲間が座っているでしょ。だからあつちに

座ってよ」とテーブルの一つを指さす。みゆうやさちもきりんグループの仲間らしく、ひさとの言うとおりでというようにとうなずいている。

「だって、ぼくが一番最初に来て、このテーブルに座っていたんだからね、ほかの人が、ここに来ないからいけないんだよ。だから、ぼくは、ここから動かない。」とかんじ。そうか、らいおんグループの仲間の子どもたちは、かんじが先に来てこのテーブルをらいおんグループと決めて座っていたのに気づかずに、違うテーブルに座ってしまったのだと納得する。ひさとが指さしたテーブルには、もう、四人ほどの子どもが座って、楽しそうにおしゃべりをしている。かんじもまた、ほかの子どもの動きを気にすることまではせずに、ただ席を取っておいたことに満足して待っていたのだろう。みゆうは、「かんじ君、それならば、ちゃんと仲間を呼べばよかったんだよ」とつぶやく。

「じゃあ、かんじ君、あっちのらいおんグループの仲間の所に行つてさ、呼んできてよ。そうしたら、ぼく

たちが、あっちのテーブルに座るからさ」とひさとが考えながら提案する。「嫌だよ。だって、ぼくが最初にこのテーブル取っておいたんだから、みんなが来ないのが悪いんだよ」とかんじは動こうとしない。かんじとしては、自分が動いている間に、そこにきりんグループの子どもが座ってしまい、なし崩しになってしまうのではないかと恐れているのかもしれない。確かに、きりんグループの子どもたちは、すぐにも座りたそうな雰囲気である。あいにく、今らいおんグループのメンバーが座っているテーブルは、六つあるテーブルの一番遠くにあつて、かんじが席を離れていく以外に、話をできる状況ではない。こんなやりとりをしているうちに、きりんグループのメンバーは、かんじのテーブルに座り始めてしまった。ひさとは、「みんなが、こつちに来るんだつたら、ちゃんと替わるからね。大丈夫だよ」と気遣つて言う。

「でもさ、ぼくが一番に席を取っておいたんだから……」とかんじがなおも思い切れないでいると、ひさ

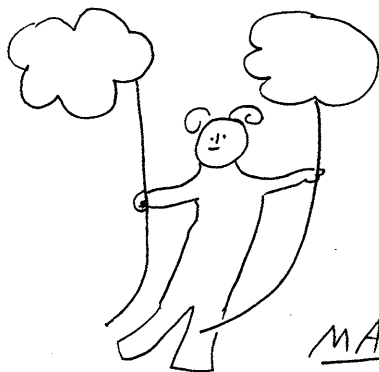
とは、「あのね。それはわかるけどさ。とにかく、今できることは二つしかないんだ！ かんじ君が、あっちにいくか。あっちの人たちがこっちに来るように言いにいくか。みんな来るんならぼくたち替わるからさ。わかる？ 二つから選ぶしかないんだからね」と繰り返し繰り返し繰り返して説く。かんじも、そのたびに「だって、ぼくがせっかく最初に来て席を取っておいたのに……」と言っていたが、ちょうどそれまで別の子どもに対応していた担任がやってきて「そうだねえ、ひさと君の言うとおりだね。とにかくみんなに相談してきただろう、ついに、仲間が座っている所へ行く。

らいおんグループのメンバーは、かんじが来たことに気がつく、「待っていたよ」という様子で迎える。「ねえ、ぼく、今日は最初に来てあっちのテーブルで待っていたのに、どうして来ないの？」とかんじが聞くと、みんな驚いて、かんじの指さしたテーブルを見る。「そうだったの」「知らなかった」「呼んでく

ればよかったのに」「でも、

あっちは、きりんグループの人が座っちゃっているよ。今日は、こっちにおいでよ」などと、口々に言う。

かんじは、みんなの言葉に耳を傾けていたが、しばらくすると案外あっさり「わかった。今日はこっちにする！」と言う。グループの仲間も、「それがいいよ」というように、みんなにこにことしている。私は、これまで自分が決めたテーブルにこだわっていたかんじのことだから、きつと自分の主張を通そうとするのではないかと予想していたので、少し驚いた。どうやら、担任も同じ思いだったらしく、「かんじ君、



MAORI

本当にいいの？」と聞く。かんじは大きくうなずく。「そうか、じゃあ、きりんグループの人にそう言ってくるっていいね。ひさと君たち、さつきから、どうなったかなって気にしているからね」と担任。かんじは、早速、「今日はあっちが、らいおんグループになったからね」と伝えに行った。担任は、「今ちょっと、らいおんグループさんの中で、かんじ君が先に座って待っていたほうのテーブルに移るか、今らいおんグループの人たちが座っている方にかんじ君が移るかって、相談していたんだけど、かんじ君がこっちに来ることにしたんですって。ちゃんと話せてよかった……」と、少し待つことになってしまったクラスの子どもたちに話し、制作の活動に移っていった。

「かんじは五歳児にもなつてつまらないことになつてわっている」と考える立場もあるだろう。「保育者も制作という予定されている活動があるのに、このようなささいなことに時間をかけるのはよくない」という

考えもあるだろう。こうした立場から見れば、テーブルも決めておくほうがよい、小学校へ行けば、座席も決まり、時間もチャイムに従って授業を受けることになるのだからと言うのかもしれない。

しかし、かんじの思いを理解し、精一杯考えて「今できることは二つしかないんだ！」と言うひさと。ひさとの説得を受けて、自分でもその二つだろうと考え、さらにグループの友達の様子から「今日は自分が動こう。そのほうがみんなにとって良さそうだ」と自ら判断したかんじ。その決断をうれしく受けとめるグループやクラスの仲間。

ささいなことに思えるが、ここにあるのは、人間として生きていくうえで、一生続く営みである。「人と人が一緒に生きていくために必要なことは、単純な決まりや、安易な協調性ではない」、そんなことに思いあたる出来事だった。

(東京家政大学 家政学部 教授 児童学科 保育専攻)